

## A 病棟入院中の悪性腫瘍患者とその家族の退院に関する思いの違い

### 大分赤十字病院 看護部

○幸 歩、植木 美穂子

自宅へ退院する際、家族の思いは患者の在宅生活に大きな影響を与える。入院中の悪性腫瘍患者とその家族が自宅退院についてどのような思いを抱いているのか、またその違いはあるのかを調査・分析した。A 病棟入院中退院予定の悪性腫瘍の患者と家族にインタビューを行い逐語録を作成しグラウンデッドセオリー。アブローチ分析を行った。患者の思いは18のラベルと3のカテゴリーに分けられ、家族の思いは21のラベルと4のカテゴリーに分けられた。患者は自分のしたいように過ごしたいという思いがあり家族は【本人への感謝】や【病気発見の遅れに対する後悔】から患者の思う通りの環境で過ごさせてあげたいという思いがある。この共通する思いから家族は【看取る決心】ができています。もう一つの共通点は患者も家族も【急変時の対処への不安】の思いがあった。一方患者と家族の思いの違いもある。患者は【状態悪化時の不安】で自身の病状の変化のみを気に留めている。先の長くない時間で自分なりの生活を送りたいという【自分優先】の強い思いがあるからだと考える。これに対して家族は、日常生活上での具体的な気がかりを表出していた。家族の、患者の細やかな面に気を配り少しでも状態の悪化を遅らせたいという思いが推測される。本研究では家族関係が良好な高齢患者が対象であったため患者本人の思いが優先され、家族がその思いに沿っていくというパターンが確認された。患者の「家に帰りたい」という思いがあるときには、在宅療養できるようサポートする社会資源の活用や家族関係を整えることが必須であった。

## P-4B-253

### 皮膚急性 GVHD のアセスメントに関する看護師の困難感

#### 長野赤十字病院 血液内科

○黒岩 利恵、溝口 亜衣、佐藤 エリナ

【はじめに】移植後の移植片対宿主病（GVHD）の症状は様々だが、移植患者のほぼすべてに見られる。急性GVHDとは、同種造血細胞移植後100日以内に見られる皮疹・黄疸・下痢を特徴とする症候群である。皮膚障害は、一日で重症化し、強い掻痒感や皮膚の皸爛・水泡・潰瘍を形成し、感染症を合併すると生命に危険が及ぶこともある。しかし、看護していくうえで、「皮疹の赤味や程度をどう表現して良いのかわからない」「今のスキンケアで本当にいいのか」などの声が聞かれた。そこで、1. 皮膚急性GVHDをアセスメントするうえで、看護師がどのような困難感を抱えているのかを明らかにし、2. 1.においてA 病棟経験年数による関係があるのかを探る目的で本研究に取り組んだ。【対象・方法】A 病棟看護師に独自で作成したアンケート調査を実施。【倫理的配慮】研究目的、得られたデータは本研究にのみ使用すること、個人が特定されないこと、本研究への参加は自由意志であり、不参加により不利は生じないことなどを明記。倫理審査会の承認を得た。【結果・考察】A 病棟経験年数を3年未満・3年～6年未満・6年以上とし、各群4人ずつの回答を得た。『皮疹の表現方法』『経過記録への記載』『皮膚症状の緩和の方法』『フローシートへの記載』『シェーマへの記載』に困難を感じており、カテゴリー別にみると、A 病棟経験年数が3年未満の群では『皮膚症状の対策』に、6年以上では各群の中で最も、『記載』に困難を感じていた。また、全ての群で『記載』において困難を感じていることがわかった。看護師間で共通認識できる統一された表現方法がないために、困難と感じていると考えられる。

## P-4B-255

### 個別にあった尿取りパッドの選択と正しい当て方

#### 小清水赤十字病院 看護部

○神鋁 園、高橋 瀬里奈、佐藤 恵子、佐藤 瞳

【はじめに】当病棟ではオムツ交換の際に高機能で長時間使用可能な尿取りパッドを複数枚重ねている場合でも、寝衣・シーツまでの尿漏れが頻回で幾度となく交換している現状がある。そこで、患者に適した尿取りパッドを選択し、適切な当て方をする事で尿漏れ予防に効果があるのか調査を行った。【方法】頻回に尿漏れ汚染がある男性患者1名を選出し、先行文献を参考にした尿取りパッドの装着方法により実施前と実施後で変化があるかを調査した。1. 適切な尿取りパッドの装着方法テープ式紙オムツの立体ギャザーを潰さないよう立てる。そして、ギャザーの内側に排泄量に見合った吸収量の尿取りパッドを1枚はめ込み、体の中心とオムツの中心を合わせて装着とする。2. 調査内容対象患者の尿量と尿取りパッド使用枚数、寝衣・シーツまでの尿漏れ回数の変化について調査する。【結果】実施前、重ね使用時には尿がほとんど吸収されておらず、尿漏れ回数は13回あった。しかし実施後には6回と約半分となった。全体を通して、2回目までテープ式オムツ内に留めることに成功し、尿漏れの回数が減少した。【考察】本研究から、患者さんの尿量に見合った尿取りパッドを使用し、特性をいかした当て方をする事で、尿漏れ予防に効果があった。本研究では、一部のスタッフを対象に手技の説明を行ったが、今後は病棟スタッフ全員へオムツの特性を理解してもらい、特性をいかした手技の統一が必要である。【結論】1. 患者さんの尿量に見合ったオムツを使用し、特性をいかした当て方をする事で、尿漏れ予防に効果がある。2. 今後は、病棟スタッフ全員へオムツの特性を理解してもらい手技を統一することが必要である。

## A 病棟看護師によるがん終末期患者への療養の場における意思決定支援

### 大分赤十字病院 看護部

○三好 裕子、藤澤 加奈

【緒言】病棟看護師が通常の退院調整を行うには、まだ課題があるとされている。服部らは「病棟看護師には退院調整で果たすべき中心的役割の認識不足や、患者・家族への意思決定支援・退院指導・連携の困難感がある」と述べている。がん終末期患者が対象となると、退院調整を行うことはさらに困難であると推測される。A 病棟には患者・家族に対し、積極的に関わりをもち、療養の場における意思決定支援を行っている看護師がいる。その看護師たちがどのように意思決定支援を行い、どのような要素が必要であるかを明らかにするため、研究に取り組んだ。【研究方法】A 病棟のキャリア開発ラダーレベル3以上の看護師で研究への同意が得られた7名を対象とし、半構成的面接を行い、サブカテゴリー化、カテゴリー化を行った。【結果及び考察】対象者に半構成的面接を行った結果、『看護師と患者の関係および環境作り』『家族との調整能力』『チーム医療』『終末期の療養の場や患者に対する看護師の想い』の4つに分類できた。『終末期の療養の場や患者に対する看護師の想い』については、患者に最善のことをしてあげたいという情緒面に関するサブカテゴリーが抽出された。最期をどう過ごすか話すことを困難に感じているという看護師もいたが、これは看護師としての倫理に基づき、行動しているためだと考えられる。また、コミュニケーションの基本的なプロセスを踏むことに卓越しており、長年の経験や緩和ケアの専門的な研修等を通し、患者も最期のことについてこだわらずに聞いてほしいという想いがあることを知ったため、最期のことも聞くことができるという看護師もいた。今回の研究で、がん終末期患者への意思決定支援を行うには『看護師の終末期の療養の場や患者に対する想い』が背景にあることがわかった。

## P-4B-254

### 個人回想法を用いたBPSD への取り組み

#### 小清水赤十字病院 看護部

○小山 彩花

【背景】認知症の7～9割にBPSD が出現すると言われ、厚労省はBPSD の対応として非薬物的介入を推奨している。当病棟においてもBPSD を有する患者は5割を占め、対応に試行錯誤しているのが現状である。そこで、精神機能に効果があるとされている回想法を実施し、BPSD の変化を調査した。【方法】BPSD を有する患者2名。A さん～不眠、危険行動。B さん～危険行動、拒否。事前に情報収集を行い、馴染みのある内容の回想法を1ヶ月間実施。実施前、中、後の様子を比較。日程と内容を記載した「しおり」を患者に配布し、実施毎に写真をスクラップ、参加シールを貼って頂く。【結果・考察】A さんは元々趣味であった編み物に取り組み、回想法として実施する時間以外にも編んでいる姿が見られた。日中傾眠傾向だったが、編み物に打ち込む時間が増える事で生活リズムが改善され夜間の良眠に繋がった。危険行動について普段から注意されている事を覚えている変化も見られ、回想法により脳が刺激された事で短期記憶やBPSD に影響を与えたと考える。B さんは花のぬり絵や裁縫を実施し、実施前から続いていた危険行動が改善された。普段全く使用しない眼鏡を掛けるという行動変化も見られ、長い入院生活で無気力だったB さんが、回想法により意欲を持ち楽しみなどの感覚を得られた事が訴えや危険行動の減少につながったと考える。また、しおりを活用する事で車椅子乗車拒否の減少に繋がりが、手元に置いて写真を見て振り返る事で患者の意欲や感覚に訴える事ができた。以上の事から患者の心理的ニーズを知り実践する個人回想法は、BPSD の改善に効果があると言える。今後もコミュニケーションの手段として回想法を活用し、それぞれの専門性を活かした質の高いケアを提供していきたい。

## P-4B-256

### 便秘傾向にある精神科患者へのオリゴ糖を用いた自然排便への取り組み

#### 釧路赤十字病院 看護部 精神科

○菅野 志織、辻 亜希奈、山田 深雪、高木 直美、南部 清美

【はじめに】当病棟では、8割以上の患者が緩下剤服用や医療処置により排便コントロールを図っている。しかし、これらは腹部不快感や下痢など患者への負担や苦痛となっている。また、イレウス発症が年間1～2例あった。自然排便が図られることで医療処置が減り、患者の負担を軽減すること、イレウスを発症さないことが課題となっている。患者の中には拘りを持つ方もいるため、生活習慣を変える事が難しい現状がある。安全性があり、少量で効果が期待されている乳果オリゴ糖を使用する事で生活習慣を変えずに自然排便が図られ、イレウスの発症や排便に伴う苦痛が軽減すると考え、本研究に取り組んだ。【方法】1日7～14g のオリゴ糖摂取（胃瘻・腸瘻患者は注入）を3週間実施。1週目は便の性状を確認。2週目より7g、3週目より排便状況をみて7～14g のオリゴ糖を摂取。使用前後の記録は排便日誌を作成、 Bristol 便形状スケールを用いて記載。【結果】5人の患者へ使用し、3人の患者で効果が認められた。特に胃瘻・腸瘻患者は、緩下剤減量や下痢を中止できた。【考察】オリゴ糖の効果発現には個人差があり、精神症状、活動量、向精神薬内服量の違いによるものと考えられた。また乳酸菌飲料によるビフィズ菌増加が図られる事で、より効果は高まると考えられた。今回オリゴ糖摂取に伴う脱水や腸捻転はなく、また生活習慣を変えることなく継続する事ができた。このことから、オリゴ糖は安全で簡便な排便コントロールの方法として、ケアの選択肢を広げていくことができた。